

合唱音楽における多様性と普遍性

～第7回世界合唱シンポジウムに参加して～

中村 透

(教育学部音楽科教授 作曲・音楽理論担当)

世界各国で3年に一回行われる合唱音楽の国際行事「世界合唱シンポジウム」(主催:社団法人全日本合唱連盟/国際合唱連合)が、2005年7月27日～8月3日の間京都国際会議場等で開催され、私も

シンポジウム講師として招かれた。日本本土のみならず世界各地の作曲家・指揮者をはじめとする合唱音楽関係者と親しく情報交換し、また各国の数多くの合唱音楽に直に接することができた。

目 次

- 1 合唱音楽における多様性と普遍性
- 4 民俗研究と文書史料
- 7 本館教養図書コーナーの図書が増えました
- 7 医学部分館相互利用のためのEPICWIN機導入について
- 7 2004年度新収蔵沖縄関係資料の紹介
- 8 医分館の改装

- 9 EU資料センター展を開催
- 10 Web of Knowledge 講習会を開催
- 11 インターンシップ(就業体験)について
- 11 図書館探検
- 12 お知らせ

この国際シンポジウムのモットーはラテン語で Cantus populi, cantus mundi. Cantus omunibus unus 「人びとの歌 世界のうた 歌は人びとをつなぐ」と謳っている。モットーが示すように、歌はあらゆる音楽表現のなかで、個としての人間の持つもっとも原初的な音楽表現形態のひとつである。しかしそれが合唱の形態、つまり個から集団の表現へと移行するとき、合唱の“歌”は民族や地域固有の文化をより一層鮮やかに反映するものとなり、世界の多様性を表すこととなる。集団表現そのものが、その表現行為に一定の組織的力学を作用させ、結果として特定の社会的脈絡における文化的語彙の関係系をシンボライズする傾向にあるからだ。たとえば、ロシアの合唱では重厚な声の重なりと、鈍重ともいえる揺るぎないテンポのなかで、厳しい大地に生きる者たちの声を聴いた。一方でニューヨークの若者たちが次々と繰り出す合唱は、アップテンポにビート感覚あふれるラテン系音楽や、ジャズ。あるいは一転

して固くまっすぐな地声の黒人霊歌という風に。

このシンポジウムで私のレクチャーに与えられた課題は、沖縄固有の音楽と自作合唱作品の関係についてであった。広く沖縄の伝統音楽の特質を語るにはあまりに限定された時間だったので、筆者は2001年に発表した混声合唱組曲「真南風(まへー)の祈り」をテキストとして、その題材となった神歌(八重山古謡等)との関係を、録音をまじえて語った。対本土音楽との相違でしばしば取り上げられのが、歌の直接の担い手となる沖縄語と、節廻しの基盤となる沖縄独自の音階である。ドミファソシで象徴される譜例1)の沖縄音階は、半音をふくむ上昇型の五音音階で、本土の伝統音楽には存在しない。そこで癒しの島“オキナフ風”ウリのひとつとしてポップ・ミュージックの「島歌」に多用されることにもなったのだが、民族音楽研究者の間では、中国雲南省やインドネシアの固有音階の一つに極めて類似したものがあることがよく知られている。

譜例 1. 1. ryukyu scale white note are nuclear tones.

譜例 2. 2. ryukyu scale

譜例 3. 3. ritsu scale

私の作品では、この音階が旋律としてはばかりでなく、和音の重層な響きとしても用いられ、結果的に“声のガムラン”風音楽現象を思わせる箇所を随所に生じた。期せずしてインドネシアの音楽家からは、彼らの音楽との類似性を嬉しげに指摘された。一方で、米国の作曲家からは「部分的にし音(譜例3.)が入っているので、現象として我々が用いる西洋の七音音階diatonicとなんら変わらないではないか」「ドミソシで構成

される和音は、ジャズコードにもある」と、執拗に食い下がることとなった。前者は自文化の耳慣れた響きと同じものが他国にもまたあることに共感し、後者は、先進自文化の模倣ととったのであろう。

へーシ(囃子)は、沖縄民謡のきわめて重要な特質であると私は考えてきたし、論考や作品でも重点的にとりあげてきた。古謡、古典音楽、民謡を問わず曲中に現れるサーヨーンナ、ハーリー、シューラーヨーといった語句である。一般には、節廻しの詞足らず部分の歌調を整えるためといわれるが、古謡の多くはその成立が祭祀歌にあるためか、言葉の意味を超



えて祈りの深い情感を表すことが多い。曲によっては、むしろこのヘーシに深く内在する情感を歌うた

めにこそあると思われるものも少なくない。



The image shows a musical score for a choral and piano piece. It includes staves for Soprano (sop), Alto (alt), Tenor (Ten), Bass (Bas), and Piano (P). The lyrics are in Japanese: "shu ra yo shu ra yo yu ba na u re. shu ra yo (o) shu ra yo shu ra yo (o) shu ra yo (o) yu ba na re yo (o) na u re." The score is written in G major and 4/4 time.



文化の違いに関わらず、合唱音楽共通の特質のひとつに宗教性がある。先述したように集団表現が本来的にもつ組織の力学が、個それぞれの情緒性を集団・社会的な枠組みをとおして、より普遍的な感情へと昇華させることができるからであろう。合唱音楽のこうした共通性が今世界でどう息づいているのかも私の尽きない関心であった。

今日の新しい日本の合唱曲は、歌詞のもつメッセージ性を執拗に追究する作品が多く、いわば言語過剰の傾向が強い。恐らくその背景には、定型詩を忌避して今風語り言葉で語りかけたい若い作曲家たちの傾向と、一方であまりに器楽的な“声のテクスチュア”化への反動的バランス・シートとして言語が扱われるからだろう。かつてニューミュージックが、極度にクロスオーバー・リズムに傾いたとき、過剰ともいえる詩句の饒舌へ走った現象に似ている。浅い息の“ことば音楽”である。

沖縄音楽のヘーシは、こうした傾向の対極にある。深い息を身体ごと丹田から立ち上げ、その息が自然な声となって緩やかに大気に弧を描き、また静かに

下降して終息する。その柔らかな繰り返しがいわばヘーシの真骨頂である。自作では、ヘーシの要素を男声・女声のさまざまなパートに配し、祈りの声を淡々と織りなす手法がとられている。こうした作曲技法と声の表現に類した合唱を、西欧、とくに北欧の現代合唱音楽に多く聴くことができたのは驚きであり、また大きな収穫であった。

多様性と普遍性、それが世界の民族固有の文化に根ざした新しい合唱音楽に花開いていることを体感し、沖縄に生きる音楽家として大きな勇気と創造の方向性を示唆されたシンポジウムであった。



民俗研究と文書史料

赤嶺 政信

(法文学部人間科学科教授 民俗学)

1 はじめに

「在来の史学の方針に則り、今ある文書の限りによって郷土の過去を知ろうとすれば、最も平和幸福の保持のために努力した町村のみは無歴史となり、我邦の農民史は一揆と災害との連鎖であった如き、印象を与へずんば止まぬこととなるであろう」とは、日本の民俗学を確立した柳田国男(敬称略、以下同じ)の『郷土生活の研究法』のなかの一節である。

柳田の民俗学は、旧来の文献史学の方法に対する批判という性格を有していたが、この一節は、文献

史学においては、依拠する史料そのものの性格に偏りが生じるのは避けられず、そのために行政文書に現れる一揆や災害と関わる庶民の姿は見えたとしても、庶民の生活文化総体へのアプローチは困難であるとの認識を示すとともに、庶民の生活文化(史)の究明を目的とする民俗学にとっての、文書史料に依拠することの限界と、それゆえにフィールドワークによる民俗資料の収集の重要性を説いたものである。小稿では民俗研究と文書史料ないし文献史学との関係をめぐる問題について、沖縄研究の現場から考えてみたい。

2 安良城盛昭の提言

1970年代以降の琉球史研究に新風を吹き込んだ安良城盛昭は、歴史研究の立場からの民俗学や民族学(文化人類学)による沖縄研究に対する疑問を以下のように述べている。

民俗学・民族学の沖縄研究を拝見していると、前近代の琉球社会を質的に連続性のあるひとつの社会であるとみなした論議が多々みうけられるように思えるからです。つまり、前近代に起因すると思われる現象にぶつかると、固有信仰でも何でもいいのですが、廃藩置県以後に新しく起こったのではない、前近代の、しかも起源の時期がはっきりわかっていない現象を見つけると、当然それはずっと昔から琉球社会に存続し続けて現在に至っている、という理解を前提として研究が進められている場合によくぶつかるからであります。(『新・沖縄史論』)

安良城が批判の対象とするのは、たとえば次の事例である。

波照間島には未婚の男性がいつまでも結婚しないと仲間が糾弾するイングミクマルという慣行が大正初期まであったが、その慣行について住谷一彦とヨーゼフ・クライナーが、「島に未婚の女性を残さないため」という「人類の始まりという局面におい

ても共同組織の存在と存続という局面においても」「最も根源的な」、その意味で超歴史的なものとして解釈している(「パティローマ」)ことに対して、それは誤りであると安良城はいう。すなわち、近世末期に八重山の人口減少に歯止めをかけるべく王府が結婚奨励を行い、それでもなお結婚しない男女に対する罰則を規定していることを具体的な史料で示し、イングミクマルはそのような王府の政策との関連で理解すべきである、と説くのである。

また、御嶽は、民俗学が精力的に議論してきた対象の一つであるが、安良城は、宮古に関する『与世山親方規模帳』(1767)の「諸村嶽、之儀、故佐渡山親方被召定置候通可致崇敬之処、其外無謂嶽、崇敬二而造佐仕候由、不宜候間向後可召留事」という記事の存在を指摘し、首里王府の認めた公事御嶽と勝手に新しく村の中に生まれてきた王府非公認の御嶽の混在している状況について注意を促している。

民俗を歴史的過程の中に位置づけて議論すること、あるいは王府の政策との関連で民俗を理解する視点の必要性についての安良城の提言からすでに20年以上が経過したが、その間の民俗学がこの提言に対して十分対応してきたようには思えない。以下で、安良城の提言に応じるかたちで祖先祭祀の民俗について若干の検討をしてみたい。

3 王府の政策と祖先祭祀

1983年に刊行された『沖縄大百科事典』では、「祖先崇拜」について以下のように解説されている。

奄美、沖縄の民俗社会は祖先志向的な社会と称されることがあるように、その固有信仰の核に祖先崇拝ないし祖先祭祀を有している。…祖先として祀られる死者は、…最終年忌をへて個性を消滅し神化した祖霊と、これ以前の霊位という、二重の構造をとる。…この儀礼[最終年忌]をへた家族レベルの祖霊は、親族レベルにおいては始祖を含め門中など一族の祖霊に吸収される。さらに一族の祖霊は、村落レベルにおいて御嶽の神が象徴するシマの祖霊に統合され、シマの秩序と統一の基調をなすと考えられる。

この解説は、祖先祭祀について共時的視点から述べたものであり(その当否については問わない)、歴史的視点が完全に欠如している。歴史的視点が欠如しているにも拘わらず、祖先祭祀が固有信仰であると述べるところに、先の安良城盛昭の批判が向けられることになる。以下で見えていくように、沖縄の祖先祭祀の民俗は、近世の王府の宗教政策を考慮に入れないと、肝腎な点を見誤る結果になる。

『球陽』巻十六尚穆王三十年(1781)の条に、「五月十七日、名嘉村親雲上の善行を褒奨す」として、以下の記事が載っている。

与名城郡伊計村は、原来、忌辰・節祭並に挙行せず。上届丑年、平安座村前名嘉村親雲上、南風掟に任ずるの時、両総地頭、其れをして伊計村下知役たらしむ。名嘉村、

屢、其の村に往きて以て教示を加ふ。又時に男女を喚集し、囑して曰く、子孫たる者、父祖の忌辰並びに節祭の礼を知らずんば、是れ人間の本心を滅し、誠に然るべからざるなりと。(略)百姓漸次感発し、是の歳七月、始めて盆祭を行ひ、(略)。名嘉村、己の資を折費し掛物神主七十一軸を設造して、各人に分与す。此れより正・七月並びに忌辰・節祭に逢う毎に、即ち祭祀を行ふ(略)。

この史料は、今日のフィールドワークからは想像しえないいくつかのことを我々に教えてくれる。まず、伊計村(伊計島、現うるま市)では、18世紀の後半まで家に位牌(神主)がなく、従って忌辰(死者の命日)や節祭(年中行事のことを節日(シチビ))という表現があるので、その意味に解しておく)の際に祖先(位牌)に対する祭祀が行われていなかったこと、および当時は盆行事(「七月」)もなかったことがわかる。位牌や祖先祭祀に関わる行事の普及は、名嘉村親雲上という地方役人の指導によるものであったことに注意を向ける必要がある。「子孫たる者、父祖の忌辰並びに節祭の礼を知らずんば、是れ人間の本心を滅し、誠に然るべからざるなり」と村人に説教を垂れているところからして、名嘉村親雲上が儒教を政治秩序の根幹に据える王府の政策の意向を受けたものであることは疑い得ない。なお、「正・七月並びに忌辰」でいう正月の行事は、今日沖縄全域で盛んに行われている一般に墓前祭祀を伴う1月16日の祖先祭祀の行事のことであろう。



仏壇と位牌

当時の伊計村の祖先祭祀をめぐる状況が、この地域に限られたものではなく、かなりの程度一般的なものであったであろうことは、1727年に作成されたと判断される『八重山島諸記帳』のなかの以下のふたつの記事から推測できる。

- 一 当島近代迄百姓等父母之位牌を豎跡弔ひ並正七月二八月之祭礼不相知処宮良肝煎を以大地中並離々迄下知いたし位牌豎右祭礼させ孝行之道を懇切に教導候故末迄無懈怠相動来候也。
- 一 諸人公界向並彼此之禮格御國元之御風俗に似寄り申様にと宮良一代心之及相勤候故今に相應に相成来候也。

この史料から、18世紀初頭の八重山でも、家に位牌がなく、位牌を対象とした祖先祭祀が行われていなかったところに、宮良という地方役人によってそれが普及していく状況は、伊計村の場合とまったく同じである。「御國元之御風俗」は、八重山から見た首里王府を中心とした当時の中央の「風俗」のことで、地方役人の宮良が王府の政策の意向を受けていたことも、先の伊計村の場合と同じである。「正七月二八月之祭礼」は、文脈からして、祖先祭祀に係わる1月16日（「十六日」）、7月の盆、2月と8月の彼岸のことと判断される。

つぎに、白川氏家譜の中の宮古の水納島に関する次のような記事に注目したい。

（略）右村之儀往古ヨリ墓所無之、虚説二惑墓仕立候儀相嫌、人葬之ハ狭ク正地モ無構方々へ埋節々祭礼ヲモ然々不仕（略）。

この史料より、水納島では死者を方々に埋葬し、その葬地に対する祭祀が全く行われていなかったことが判明する。家譜の記事内容は、模合墓を造って方々の人骨をそこに収めさせ「節々祭祀」も丁寧に行うよう指導することによって「風俗」を改良したこと、および人骨を模合墓にまとめた結果耕地の拡張が可能となったこと、これらの功績によって指導にあたった人物が王府より褒美をもらったという内容で、これは、1766年の出来事である。紙幅の都合で詳細については触れ得ないが、ほぼ同じ時期の渡名喜島においても祭祀対象としての墓がなかったことは、同島に伝わる文書史料によって確認できる（上江洲均「渡名喜島の三十三年忌祭」）。

このように、沖縄における祖先祭祀の民俗は王府の政策によって成立していく側面が認められるのであり、民俗学の側でもそのことを踏まえて議論する必要があるはずである。



墓の祭祀

4 おわりに

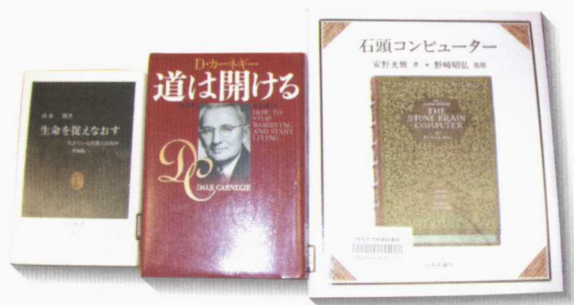
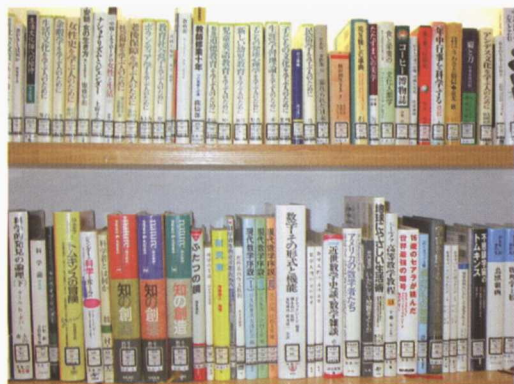
安良城盛昭の提言に関心を深めたのは、筆者の久高島研究とも関わっている。すなわち、12年に一度の午年に行われるイザイホーという祭は、従来の研究では「古代祭祀云々」という理解がほとんどあったが、久高島と王権との歴史的関係を考慮しなければイザイホーの本質は理解できないと考えるよう

になり（拙稿「歴史のなかの沖縄ーイザイホー再考ー」、さらにイザイホーだけでなく、久高島の他の民俗に関しても、歴史的過程のなかに位置づけて検討する必要を強く感じるようになってきたのである。

沖縄の民俗研究は、文献史学との有効な連繫をどのように構築できるかが今後の重要な課題の一つになるであろう。

本館教養図書コーナーの図書が増えました

2002年10月から本館2階情報ラウンジに教養図書コーナーが開設され利用されておりますが、今回新たに約400冊の図書が受け入れられました。学生の皆様多いにご利用ください。



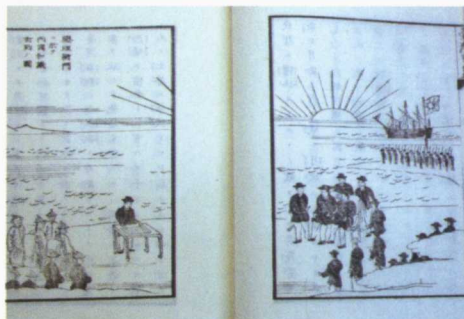
医学部分館相互利用のためのEPICWIN機導入について

医学部分館では、ILL（図書館間相互利用）の文献複写を、これまでは郵送する方式で行っていましたが、平成17年9月に文献画像伝送システム(DDS)として、カラー画像にも対応可能な、コニカミノルタ社のEPICWIN5000Cを導入し、学習、教育、研究に必要な文献の、迅速な複写サービスを図ることが可能になりました。



2004年度新収蔵沖縄関係資料の紹介

1. 台湾事略 明治8年刊 全3冊 東條保述 小倉氏蔵版
台湾における宮古島島民54人遭害事件に端を派した明治7年の日本軍による台湾出兵について、事件の経緯や和議成立に至る経過を記している。
2. 柔遠新書 全3冊 光緒10年 上海刊
清の外交交渉の窓口であった柔遠駅に関連する琉球を含めた外交史料集。



△台湾事略

医 分館の改装

医学部分館は、与儀キャンパスから昭和59年5月に現在の上原団地に移転してきましたが、狭隘化が深刻な問題となっています。このため、蔵書冊数の増加に対応した資料の配架スペース及び医学部学生に必要な閲覧席数等、学習環境整備についての空間を確保するため、集密書架（ハンドル式）、1階と2階に閲覧机6台と椅子24脚を増設しました。

また、医学部分館の利用者玄関のドアは手動

開閉式でしたが、各種施設のバリアフリー化が求められるようになり、大学図書館の一般開放とともに、身体障害者の医学部分館の利用も生じるようになってきています。玄関付近にはいくつかの段差があり、車椅子での玄関通過は困難となっていましたが、ドアの横開き式自動ドアを設置し、これらの諸問題を解消しました。

さらに、医学部分館の利用者玄関に設置されたブックディテクションシステムの現有設備は、設置後19年を経過し、誤作動の発生、修理に要する時間・経費が増加したため、更新をおこない利用環境の整備をはかりました。



1 F 集密書架



2 F 増設の閲覧机



1 F (玄関入口) 自動ドア



1 F (玄関入口) ブックディテクションシステム

EU資料センター展を開催

附属図書館では、5月16日（月）から5月27日（金）の12日間、情報ラウンジにおいて、駐日欧州委員会代表部が主催する日本と欧州連合の友好週間イベントの一環としてEU資料センター展を開催しました。

この友好週間は、欧州連合（EU）に関する理解を深めることを目的とし、毎年5月に全国で開催されています。2005年は、日本とEUとの市民交流年にあたり、附属図書館が、国内19カ所のEU資料センターの一つに指定されていることから沖縄県内の研究者や利用者にEU各国との交流への関心を高めるため開催しています。

資料センター展では、EU資料4400点の中からEUが発行する紹介パンフレットや統計関係

資料、各国のパンフレットやポスターなど、約130点の資料の他、EU情報のデータベースが参照できるパソコン、EUを紹介するビデオ映像等が展示されました。見学者は実際にパンフレットを開いてじっくりと資料を読んだり、真剣な表情でビデオ映像に見入っていました。また、来場者には、アンケートに答えた先着150名にEU特製のストラップの贈呈があり、対象となった来場者は戸惑いながらも嬉しそうに受け取っていました。

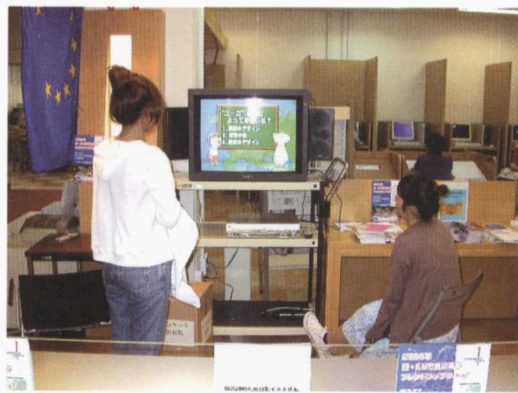
アンケートでは、「色々な国が集うEUの実態を知ることができる良い機会だと思います」等、EUへの関心が伺われました。



『マンガ EUとユーロ』
駐日欧州委員会代表部広報部発行



EU資料センター展の様子



EU資料センター展の様子

Web of Knowledge 講習会を開催

関心高く定員超

附属図書館では、6月2日（木）から3日（金）の2日間、Web of Knowledge の利用講習会を開催しました。Web of Knowledge はトムソンサイエンティフィック社が提供するデータベースのポータル（入り口）で、外国学術文献や引用文献を効率よく検索することができます。研究者にとってたいへん有用なデータベースで講習会への関心も高く、教職員・学生のほか、ゼミで参加した教室や、他大学の図書館員等、定員を上回る120名余の参加がありました。

講習は講師のデモンストレーションに合わせてながら参加者も実際にパソコンを操作する実践的なもので容易に検索方法を習得することができます。アンケートでは「とても良い」「良い」「使えるようになる」といった感想を多くいただきました。

※ Web of Knowledgeとは ……

トムソンサイエンティフィック社が提供するデータベースのポータル（入り口）です。

琉球大学では Web of Science（全学術分野）、BIOSIS Previews（ライフサイエンス系）、PsycINFO（心理学分野）、Journal Citation Reports（Impact Factor＝雑誌重要度）が利用できます。

電子ジャーナルサイトへもリンクしていますので、検索した論文によってはフルテキスト（全文）までアクセスすることができます。



パソコンで実習する受講者



初日に行われたSiewTyng Fung氏（シンガポール支社）による図書館職員向け講習（日本語通訳付）、他の図書館からも13名の参加があった。

情報リテラシー

附属図書館では、今回のような講習会以外にも情報リテラシー教育の一環として情報科学演習や基礎演習など、授業と連携した講習会（図書館職員によるOPAC検索、雑誌記事検索等の講習）を年間120回以上行っています。

情報リテラシー教育や利用者教育に力をいれることは本学の中期目標・中期計画にも挙げられており、今後とも、これらの活動を継続的に推進することにしています。

※図書館講習会の詳細は図書館ホームページの[講習会]、Web of Knowledgeの利用は[雑誌論文・記事]をご覧ください。

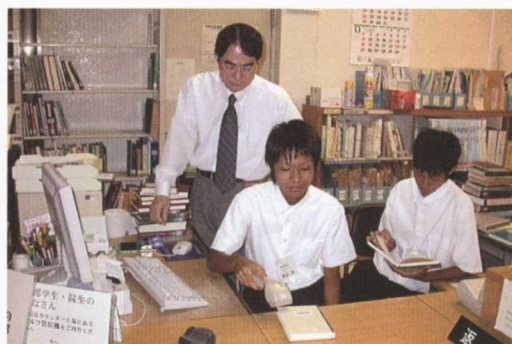
(<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>)

インターンシップ(就業体験)について

附属図書館では、7月13日(水)から15日(金)の3日間、翌週7月19日(火)～21日(木)の2.5日間就業体験の高校生をそれぞれ2名(県立西原高校2年生、知念高校2年生)受入れ、図書館の業務を体験してもらいました。

その内容は、①カウンター業務 ②資料整理業務 ③図書・雑誌の受入れ業務 ④情報検索等でした。

さすがに最初は緊張した様子でしたが、まじめな態度で実習に取り組んでいました。最後の図書館職員との懇談会では「想像していたより大変だった」「窓口だけかと思った」「今回の経験を自分の将来に生かしたい」「簡単なことも、おつかしいこともあったが楽しかった」等の意見がありました。今回の体験で仕事は窓口だけでなく、いろいろな仕事がありそれぞれの仕事に関連していることが少しは理解できたのではないかと思います。又短期間ではありますが普段の学校生活では経験できないことを実際の仕事とおして体験する事ができ、働く大変さと楽しさを感じることができたかと思えます。図書館での「就業体験」を通して早い時期に進路を考えて、自分の将来の「職業」に関心を持ち、有意義な高校生活を過ごして欲しいと思えます。



図書館探検

附属図書館では、6月2日(木)に附属小学校2年生による図書館探検がありました。小学生からは「古い本がたくさんあってびっくりした」「本を機械で貸出ししていてびっくりした」「英語で書かれた新聞があるのでびっくりした」等の感想がありました。また、7月12日(火)は担任教諭が引率し館内を見学しました。今回の探検を元に次回それぞれ希望する場所の見学をする予定ということです。どんな場所に子どもたちが興味を持ったのが楽しみにしたいと思います。



お知らせ Information

2005年度 開館カレンダー

本館

10月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

11月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

12月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

1月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

3月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

医分館

10月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

11月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

12月 (2005年)						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

1月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

3月 (2006年)						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

開館時間 黒(Black) 8:30~22:00 緑(Green) 10:00~20:00 青(Blue) 8:30~17:00 赤(Red) 休館(Close)

図書館の開館時間の延長について

附属図書館では、利用者の皆様へのサービス向上を計るため、10月より土、日、祝日(休業期を除く)の開館時間を10:00~20:00へと延長いたしました。

本館だより

第249回

附属図書館運営委員会録

平成17年5月31日

○協議事項

1. 学術情報基盤資料選定委員会について
 - (1) 委員会内規及び関連規程について
 - (2) 委員選出について
 - (3) 平成17年度雑誌講読調査について
2. 琉球大学附属図書館平成16年度決算について
3. 琉球大学附属図書館平成17年度予算について
4. 琉球大学附属図書館研究開発室員の推薦について

○報告事項

1. 科学研究費補助金研究成果公開促進費について
2. 附属図書館自己点検・評価報告書について

医分館だより

第55回

医学部分館運営委員会録

平成17年6月28日

○協議事項

1. 平成17年度図書館備付け学生用図書を選択について
2. その他
 - (1) 学術雑誌の廃棄について

○報告事項

1. 平成17年度第1回附属図書館学術情報基盤資料選定委員会
 - (1) 平成18(2006)年度学術雑誌の購読希望等調査について

第56回

医学部分館運営委員会録

平成17年8月24日

○協議事項

1. 平成18(2006)年度基盤雑誌の選定について
2. 平成17年度(第2回)図書館備付け学生用図書を選択について

琉球大学附属図書館報「びぶりお」第38巻第2号(通巻第143号) 発行日:2005年(平成17年)10月1日

発行:琉球大学附属図書館 編集:びぶりお編集委員会

〒903-0214 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地 TEL:098-895-8168 E-mail:referen@lib.u-ryukyu.ac.jp